

2013 年度日本選挙学会総会・研究会

「フランス FN（国民戦線）のトランスフォーメーション：2012 年大統領選を中心に」

吉田 徹（北海道大学）

本報告は、フランス極右政党「国民戦線（FN）」の最近の変容の過程およびその要因を探る。

2012 年フランス大統領選において、FN 候補のマリーヌ・ルペンは保革 2 大政党候補に次ぐ票を獲得（17.9%）し、名実ともに第三極の座を占めつつあるようにみえる。続く下院選で FN は、1986 年来となる議席（2 議席）を獲得した。もっとも、マリーヌ・ルペンが世間の注目を集めたのは 2011 年に、父親のジャン＝マリ・ルペンの後継者として党首に党員投票で選出され、同年の支持率調査でトップを走るなど、2002 年大統領選以降低迷していた FN の再興は極めて短期間に成し遂げられた。

本報告はまず、こうしたマリーヌ台頭の理由についての幾つかの仮説を提出してみたい。マリーヌの FN は、他国の多くの主要極右政党と同様、それまでの「経済的新自由主義×文化的保守主義」の政策立場を「福祉国家×文化的保守主義」へと組み替え、その排外主義の論理を変化させた。また、反革命、ファシズム、反ユダヤ主義、ネオナチズム、植民地主義、王朝主義など、それまで 60 年代から FN が肯定的に扱ってきた言説を棄却し、これまで弱点とされていた経済争点についてもユーロ圏脱退など訴え、「脱－悪魔化（Dedibolisation）」を果たし、「普通の政党」へと変容することに成功した。この一連の過程で、FN は労働者層に最も支持される政党としての地位を固めることになった。

その限りで、FN を極右としてだけ捉えるだけでなく、「ナショナル・ポピュリズム」（Taguieff,2002）もしくは「右派ポピュリスト政党」（Bornshier,2010）と捉える視角が必要になってくるだろう。そこで、本報告はフランスにおけるポピュリズムに関する言説・研究についての紹介も併せて行いたい。

他方で、2012 年大統領選に焦点を当てる限り、以上の FN の「トランスフォーメーション」は、サルコジ大統領のリーダーシップのもとでその言説と戦略を大きく変化させてきた既存右派（保守）との関係を精査する必要も出てくる。構成する政党は変化したものの、1970 年代に完成した「二極のカドリーユ」（デュヴェルジェ）の枠組みは持続しており、UMP および社会党という保革 2 大政党にとっては、極右と極左の選挙での競合関係をどう処理するかの課題が大きくなっているからである。

もちろん、FN のトランスフォーメーションと選挙での再興は、有権者行動と意識変化と密接に関係している。実際、先の大統領選で様々な争点の設定を行ったのは、ルペン候補であったといっても過言ではない。本報告では、2012 年大統領選をケースに、どのような有権者意識が FN の躍進につながったのかを精査したい。

以上のような変容の過程を経たマリーヌ・ルペンの FN を、その言説、選挙戦略、政党システム、有権者行動の中に位置づけることで体系的に把握し、西欧極右政党の躍進・退行・変化の流れとどう関連しているのかについての理解の一助を提供するのが本報告の目的となる。